

Prasannapadā における Dignāga の認識主体批判について

松 本 恒 爾

はじめに

Mūlamadhyamakakārikā (MMK) の注釈である Candrakīrti 作 Prasannapadā (PP) の Chap.1 において、ある仏教論理学者の認識論批判が行われている。これは PP を研究する際に必ず用いられるであろう La Vallée Poussin の校訂本 (LVP[1903-13]) で言うならば、p.58 l. 7~p.75 l. 13 に相当する。本稿の目的は、その中でも特に p.64 l. 14~p.65 l. 8 で行われる認識主体批判の新しいサンスクリットテキスト (Skt.) とそれに基づく和訳を提示し、考察することである。

ところで、その PP における認識論批判で、批判対象となっている著作名や人名が言及されることはない。では何故、本稿の題名に Dignāga という人名を付したかというならば、引用や批判内容、そして近年発見されたサンスクリット語による PP の複注の記述からして、この認識論批判の内容が Dignāga の Pramāṇasamuccaya (PS)、並びにその自注 (PS[V]) に基づいていることは、ほぼ確実であると考えられるからである。

1. PP における認識論批判の構成

ここでは、PP における Dignāga の認識論批判の構成を解説する。これによって、本稿で扱う Dignāga の認識主体批判がどのような文脈の中で行われているかが明らかになるだろう。さらに、PP における認識論批判が Dignāga の PS 並びに PS[V] に基づいていることも理解されるだろう。

Dignāga は、PS の著作動機を PS[V] で次のように述べている。

[PS の著作動機]²⁾

「このような特質をもつ教師（仏陀）に敬礼し、＜正しい認識手段の成立のため＞に、（つまり、）＜他者の認識手段の否定のため＞と＜自分の認識手段の特質の宣揚のため＞に、ここで自分の著作である Nyāyamukha 等を集成し、Pramāṇasamuccaya が著作されるだろう。何故ならば、認識対象の理解は認識手段に依拠するというこの場合に、多くの異解者達がいるからである。」

ここで、PS を著作する動機は、＜正しい認識手段の成立＞（pramāṇasiddhi）のためであり、それが＜他者の認識手段の否定＞（parapramāṇapratiṣedha）と＜自分の認識手段の特質の宣揚＞（svapramāṇaguṇodbhāva）という二つによって達成されることが理解されるだろう。そして、＜正しい認識手段の成立＞の内容とは、認識対象の理解は認識手段に依拠することであることも理解されるだろう。

さらに、この＜正しい認識手段の成立＞の内容を説いた PS[V] の「何故ならば、認識対象の理解は認識手段に依拠する」（yasmāt pramāṇāyattā prameyapratipattiḥ）³⁾ という箇所は、Jinendrabuddhi の複注 (PS[T]) において、次のように注釈されている。

[PS[T]]⁴⁾

『何故ならば……』(yasmāt ……)云々によって、認識手段が人の目的(利益?)に適ったものであることが示されている。さもないと、それに適っていないものを理解させるのは無意味であるから、けっして(PSの著作は)なされるべきではないだろう。さらに、ここでの『認識対象』とは<捨て去られるべきもの>と、<受け入れられるべきもの>である。何故ならば、その理解は認識手段に依拠するから、それ故に、認識手段の成立のための努力は効果を伴うと意図されている。』

ここでの述べられている<人の目的に適ったもの>(pursāarthopayogin)の<人の目的>(puruṣārtha)とは、いうまでもなくさとりのことだろう。PS[T]によるならば、DignāgaがPSを著作することは、さとりに適ったものであるから、無駄ではなく、効果を伴うのだと述べている。⁵⁾

さて、上記のようなPSの著作動機を前提として、次のようにPPにおける認識論批判は始まっている。

[PPにおけるDignāgaの認識論批判導入部]⁶⁾

「さて、(Dignāgaは)このように言うだろう。

『この世間的な認識手段や認識対象といった慣習が我々の論書によって言及されている。』

『では、その言及したところの効果が説かれなければならない。』

『悪しき論理学者達による誤った定義の陳述によって、それ(慣習)が破壊されたから、その正しい定義が我々によって説かれるのである。』

『それは相応しくない。なぜなら、悪しき論理学者達によって誤った定義の提示がなされた(認識手段や認識対象といった)定義されるものについての誤りが、世間の人々にとってあるならば、そのための効果を伴う努力があるだろう。しかし、それはそうではないので、この努力は無意味である。』

上記から、Candrakīrtiにとって、認識手段や認識対象などの認識論を説く論書は、すなわちPSは世間の人々の慣習(lokavyavahāra)のみが問題とされていることが理解されるだろう。⁷⁾これはPS[T]で述べられているようなPSを著作することがさとりに適ったことではありえないということである。つまり、Candrakīrtiにとって認識論自体が、さとりを得る手段を説くものでないということの表明である。

さらに、もし世間の人々の認識論に誤りがあるとしても、それは悪しき論理学者達(kutārkikāḥ)のせいではないとCandrakīrtiは述べている。これはPSの著作動機である<正しい認識手段の成立>の達成に必要な<他者の認識手段の否定>が無意味であるという批判である。⁸⁾では、Dignāgaの<正しい認識手段の成立>の達成に必要なもう一方の<自分の認識手段の特質の宣揚>に対する批判は行われないのであるか。実は、このPPにおける認識論批判の大部分は、この批判を行うことに費やされるのである。その場合、認識論は世間の人々の慣習のみが問題とされ、さとりを得る手段を説くものではないとするCandrakīrtiによって、自身の認識論が述べられることで、Dignāgaの<自分の認識手段の特質の宣揚>に対する批判が行われるのではない。世間の人々の慣習のみを問題としているはずのDignāgaの認識論の世間の人々の慣習に対する違反を指摘することで、その批判が行われるのである。本稿で扱う認識主体批判は、この<自分の認識手段の特質の宣揚>批判の中で行われているのである。

2. Dignāgaの認識主体批判のサンスクリットテキストとその試訳

以下に、Dignāgaの認識主体批判のサンスクリットテキストとその試訳を提示する。このSkt.は

,LVP[1903-13]を底本とし,⁹⁾ MacDnald[2000]によってその重要性が喚起された Oxford 写本 (Ox.)¹⁰⁾ とチベット語訳 (Tib.)¹¹⁾ を参照して筆者が作成したものである。

[Skt.]

api ca yadi jñānaṃ karaṇaṃ viśayasya paricchede kaḥ kartā, na ca kartāram antareṇāsti
karaṇādinaṃ sambhavaś chidikriyāyām iva /
atha cittasya tatra kartṛtvaṃ parikalpyate, tad api na yuktaṃ, yasmād arthamātradarśanaṃ
cittasya vyāpāro 'rthaviśeṣe caitasānām /
tatārthadr̥ṣṭir vijñānan tadviśeṣe tu caitasāḥ / (MAV Chap.1-v.8cd)
ity abhyupagamāt / ekasyāṃ hi pradhānakriyāyām / sādhyāyām yathāsvaṃ guṇapradhānabhāve
nāṅgabhāvopagamāt syāt karaṇādinaṃ karaṇāditvaṃ na ceha jñānavijñānāyor ekā pradhānakriyā
kin tarhy arthamātraparicchittir jñānasya pradhānakriyā jñānasya tv arthaviśeṣapariccheda iti
nāsti jñānasya karaṇatvaṃ nāpi cittasya kartṛtvaṃ tataś ca sa eva doṣaḥ /

[試訳]

「さらにまた、もし知識が道具であるなら、境の判別について何が主体か。そして、主体のない道具等はありません、斧の作用のように。

或いは、その場合、心に主体性を妄想するのかもしれないが、それも相応しくない。何故なら、対象一般の認識が心の機能であり、対象の差別については心所の（機能）である。

『その場合、対象の認識は識である。一方、その差別は心所である。』（MAV Chap.1-v.8cd）と承認されているからである。

実に、一つの主要な作用が成り立つ場合、副次と主要という存在状態によって、それぞれ部分という存在状態が認められているから、道具等に道具性等があるだろう。しかし、この場合、知識と識の両者の主要な作用は一つではない。では何かというなら、対象一般の判別が識の主要な作用であり、一方、対象の差別の判別が識の（主要な作用）である。というので、知識に道具性も存在しなければ、心にも主体性はない。それ故に、さらにこれこそ過失である。」

3. Dignāga の認識主体批判の考察

先に提示した試訳に基づいて、本稿の目的である認識主体批判についての考察を順次行っていくことにする。Dignāga の認識主体批判は、次の Candrakīrti の批判から始まっている。

「さらにまた、もし知識が道具であるなら、境の判別について何が主体か。そして、主体のない道具等はありません、斧の作用のように。」

ここでは、境の判別 (viśayasya paricchedaḥ) において、つまり認識において、Dignāga が主体を説いていないことが批判されている。

まず、確かに Candrakīrti によって批判される通り、認識主体を Dignāga は説かないだろう。さらに、正確に言うならば、認識において認識主体を Dignāga は説けないのである。

何故ならば、それは有形象唯識派 (Sākāravijñānavādin) の立場をとる Dignāga にとって、認識に主体を認めることは、アートマンを認めることであり、仏教の基本的立場である無我と背くことになるからである。¹²⁾ ちなみに、Dignāga の認識とは、PS[V] によるならば、＜知識の二相性＞ (jñānadvirūpatā, に基づ

いて、一つの知識が＜対象としての顕現した知識＞（arthābhāsaṃ jñānam）と＜（知識）自身としての顕現した知識＞（svābhāsaṃ jñānam）に分化し、知識が知識自身を対象とする自己認識（svasaṃvedana）である。¹³⁾

では、認識に主体がなければならぬと Dignāga を批判する Candrakīrti が仏教徒であるにもかかわらず、アートマンを認めているのかというなら、そうではない。先に述べたように、Candrakīrti にとって、認識論は世間の人々の慣習のみを問題としているのである。このようならば、この批判の意図はアートマンを論じる以前の問題である。つまり、世間の人々の慣習の上では、斧という道具の作用は、「人が斧で木を切る」というように、主体（kartr）, 道具（karaṇa）, 対象（karman）という三つの存在状態（bhāva）によって表現されている。それ故に、道具たる認識手段の作用も⁴⁾、「人が認識手段で認識対象を認識する」と三つの存在状態によって表現されるべきだということである。

しかし、Dignāga は、PS[V] で認識対象の理解は認識手段に依拠すると説くだけなので、それは世間の人々の慣習で認められている表現に違反しているから、Dignāga の世間の人々の慣習を説く認識論として誤っているのである。

さらに、次のような Candrakīrti の批判が続く。

「或いは、その場合、心に主体性を妄想するのかもしれないが、それも相応しくない。何故なら、対象一般の認識が心の機能であり、対象の差別については心所の（機能）である。

『その場合、対象の認識は識である。一方、その差別は心所である。』（MAV Chap.1-v.8cd）と承認されているからである。」

この批判は、単に、Madhyāntavibhāga（MAV）が、心を認識主体として説いていないから、Dignāga が心を認識主体とするのは定説と矛盾するということであろう。

ところで、世間の人々の慣習の上で、認識主体として心を Candrakīrti が認めている可能性は極めて高いと考えられる。何故なら、Candrakīrti が＜中の定説＞（Madhyamakasiddhānta）が説かれているとする Nāgārjuna 作の Ratnāvali（RA）において、次のように認められているからである。¹⁵⁾

[RA Chap.4-v.64]¹⁶⁾

『何が見るか？』というならば、心（が見るの）であると（世間の人々の）慣習として述べられる。

実に、（勝義においては）心は心所を欠いても、（心所を）伴っているとも主張されない。無意味であるからである。」

さらに、この RA でも言及されているように、仏教（特に説一切有部）では、心とその働きである心所をそれぞれ別の法（dharm）として考え、両者の結びつきによって、心の働きが説明される。これは所謂心所相応（cittacaittānām saṃprayuktah）であるが、この心所相応は世俗（saṃvṛti）、すなわち世間の人々の慣習であると、次のように Candrakīrti によって述べられている。

[Candrakīrti の心心所]¹⁷⁾

（対論者が問う。）「いったいどのようにして心と心所は所縁を伴うのか。」

（答える。）「その定義は世俗的なものであって、勝義的なものではないので過失ではない。」

このようであるから、次の箇所は、世間の人々の慣習である心心所相応を説いたものだと考えられる。

「実に、一つの主要な作用が成り立つ場合、それぞれ副次と主要という存在状態によって、部分という存在状態が認められているから、道具等に道具性などがあるのだろう。」¹⁸⁾

この場合、一つの主要な作用とは、いうまでもなく認識である。さらに、副次と主要という存在状態

(guṇapradhānabhāva) とは、それぞれ心所と心のことである。つまり、世間の人々の慣習の上で認められている心心所相応に基づく認識に、主体（心）、道具（認識手段）、対象（認識対象）が部分という存在状態（aṅgabhāva）として認められているというのである。

ところが、Candrakīrti は、同じく心心所相応を説く MAV Chap.1-v.8cd を次のように批判している。

「しかし、この場合、知識と識の両者の主要な作用は一つではない。では何か、というなら、対象一般の判別が識の主要な作用であり、一方、対象の差別の判別が知識の（主要な作用）である。というので、知識に道具性も存在しなければ、心にも主体性はない。それ故に、さらにこれこそ過失である。」

ここで知識というのは心所が言い換えられているのだろう。そして、「主要な作用は一つではない」というのは、MAV Chap.1-v.8cd の心心所相応の解釈によるならば、心と心所がそれぞれに認識という主要な作用が成立することになるというのである。これは、Candrakīrti が世間の人々の慣習の上で認められていると考える心心所相応による認識に違反している。それ故に、知識（心所）も認識の道具ではないし、心も主体とはならないので、過失だというのである。

ちなみに、Dignāga と同じく、MAV も認識主体を説けないだろう。Asaṅga の MAV の注釈（MAV[Bh]）によるならば、この MAV Chap.1-v.8cd で、虚妄分別（abhūtaparikalpa）の同義語（paryāya）が説かれるのだという。¹⁹⁾ 虚妄分別とは、把握者（grāhaka）と被把握者（grāhya）を分別することである。²⁰⁾ この場合、前者が心所であり後者が心となり、二つによって識、つまり認識が成り立つというのだろう。²¹⁾ それ故に、Dignāga と同様に、MAV も認識に主体を認めることは、アトムを認めることに等しいから、認識主体を MAV も説けないのである。

4. 結語

以上、PP における Dignāga の認識主体批判を考察した。この考察によって理解されることは、次の通りであろう。

- （１）Candrakīrti は、あくまで認識論が世間の人々の慣習のみを問題とするとして、それがさとりを得る手段を説くものではまったくなく考えている。
- （２）Dignāga の認識主体批判は、PS[V] の＜自分の認識手段の特質の宣揚＞に対する批判の一環として行われている。
- （３）Candrakīrti は、認識において主体を認めることができない Dignāga に対して、世間の人々の慣習という立場から、その認識論を批判している。この批判は、Dignāga の＜知識の二相性＞批判であるということも可能であろう。
- （４）Candrakīrti にとって、世間の人々の慣習によって認められる認識とは、心心所相応による認識である。

〔後記〕

貴重な Ox. を参照する機会を下さった大正大学講師米澤嘉康先生、並びに同大学講師長島潤道先生にお礼を申し上げます。

註

- 1) Lakṣaṇāṭikā (LT) のことである。LT については、米澤 [1999],[2004] 参照。
- 2) evaṅguṇaṃ śāstāraṃ praṇāmya pramāṇasiddhyai svaprakaraṇebhyo Nyāyamukhādibhya iha samāhṛtya Pramāṇasamuccayaḥ kariṣyate parapramāṇapratīṣedhāya svapramāṇaguṇodbhāvanāya ca, yasmāt pramāṇāyattā prameyapratipattir bahavaś cātra vipratipannāḥ. (Cf. Steinkellner[2005-1] p.1 ll.10~14.)
- 3) PP. にパラレルが存在する。
api ca, yadi pramāṇādhīnaḥ prameyādhigamas tāni pramāṇāni kena paricchidyanta ityādinā Vigrahavyāvartanyāṃ vihitto doṣaḥ / tadaparihārāt samyaglakṣaṇadyotakatvam api nāsti / (Cf. LVP[1903-13] p.59 ll.4~6.)
- 4) yasmād ityādinā purśārthopayogitvaṃ pramāṇasya darśayati / anyathā tadanupayogino vyutpapādanaṃ vyartham ity akartavyam eva syāt / prameye punar atra heyam upādeyaṃ ca / tatpratipattir yataḥ pramāṇāyattā , tasmāt pramāṇasiddhaye yatnaḥ saphala ity abhiprāyaḥ // (Cf. Steinkellner[2005-2] part I p.21 ll.6~9.)
- 5) このような Jinedrabuddhi の解釈に従うならば、Dignāga の認識手段は、^{• • •}さとりをも認識対象とするものであったこととなる。
- 6) Cf. LVP[1903-13] p.58 l.14~p.59 l. 3. (ボールド部分は LT で注釈されている箇所を示している。)
atha syād eṣa eva pramāṇaprameyavyavahāro laukiko 'smābhiḥ śāstreṇānuvarṇita iti // tadanuvarṇanasya tarhi phalaṃ vācyam // kutārkikaiḥ sa nāśito viparītalakṣaṇābhidhānena, tasyāsmābhiḥ samyaglakṣaṇam uktam iti cet // etad apy ayuktam / yadi hi kutārkikair viparītalakṣaṇapraṇayanam kṛtaṃ lakṣyavaiparītyam lokasya syāt, tadarthaṃ prayatnasāphalyaṃ sāt, na caitad evam iti vyartha evāyaṃ prayatna iti /
以下にこの箇所の LT の和訳を提示する。(Arnold[2003] p. 157, n.7 にも英訳されている。)
『『さて、……』云々というのは、認識手段や認識対象といった慣習は、世間的ものであり、勝義的なものには相応しくない、とうこの立場について、述べてられている。『我々によって』とは Dignāga 等によってである。『その言及したところの効果が説かれなければならない。』とは聖者(Candrakīrti ?)が(述べたの)である。『悪しき論理学者によって……』とは、Dignāga が(述べたの)である。『それ』とは慣習である。(laukika eva pramāṇaprameyavyavahāro yukto na pāramārthika ity asmin pakṣe āha / atha-ityādi / asmābhir Dignāgādibhiḥ / tadanuvarṇanasya phalaṃ vācyam ity atrāryaḥ / kutārkikair iti Digāgaḥ / sa iti vyavahāraḥ / Cf. 米澤 [2004-2] p. 124[2b4], p.142.)
- 7) はたして、Dignāga も Candrakīrti と同様に、認識論を世間の人々の慣習のみを問題とするものしていたのだろうか。それは PS[V] の Chap.1 を読む限り判然としない。ただし、Dignāga の後継者である Dharmakīrti は PVin の直接知覚章の最後で次のように述べている。
「そして、これ (PVin) は、慣習的な認識手段のあり方が説かれたものである。それにも、他の愚かな者達は、世間の人々を欺いている。一方、思慮の智慧の繰り返しによって、錯乱を離れ、清浄で、汚れなき、不退転の勝義的な認識手段が現前する。それも、ほんの少し (この PVin で) 明らかにした。」
(sāṃvyavahārikasya caitat pramāṇasya rūpaṃ uktam , atrāpi pare mūḍhā viśaṃvādayanti lokam iti / cintāmayīm eva tu prajñām anuśīlayanto vibhramavivekanirmalam anapāyī pāramārthikapramāṇam

abhimukhīkurvanti / tad api leśataḥ sūcitam eveti // Cf. Steinkellner[2007] p.44 ll.2~6.)

上記のように Dharmakīrti は認識手段に慣習的な (sāṃvyaavahārika) 認識手段と勝義的な (pāramārthika) 認識手段の二つを認めている。

8) PP の別の箇所では、次ように述べられている。

「けれども、自分の為の推理については、いかなる場合でも、自分の承認が重要である。(対論者) 両者の承認は(重要で)はない。それ故に、議論の定義の論述は無意味なものである。仏陀は、(世間の人々それぞれの) 自分の承認による論理(妥当性?) ごとに、それ(論議の定義)を意識しない教化される人々を利益しているからである。」

(svārthānumāne tu sarvatra svaprasiddhir eva garīyasī, nobhayaprasiddhiḥ / ata eva tarkalakṣaṇābhīdhanam niḥprajayānam, yathāsvaprasiddhayopapattya buddhais tadanabhiḥjñāvineyaj anānugrahāt / Cf. LVP[1903-13] p.35 l. 9~p.36 l. 2.)

このような記述からして、世間の人々の認識論に過失があったとしても、Candrakīrti にとって、それは世間の人々の自分の承認による論理 (svaprasiddhayopapatti) による過失であって、悪しき論理学者によって説かれた認識論による過失ではないというのだろう。

9) LVP[1903-13] p.64 l. 14~p.65 l. 8 は以下の通りである。

short daṇḍa はカンマ (,) で表記した。[] 内は校訂者 La Valée Poussin による補いである。

api ca, yadi jñānam karaṇam viśayasya paricchede kaḥ kartā, na ca kartāram antareṇāsti karaṇādīnām sambhavaḥ chidikriyāyām iva //

atha cittasya tatra kartṛtvam parikalpyate, tad api na yuktaṁ, yasmād arthamātradarśanam cittasya vyāpāro 'rthaviśeṣa[darśanam] caitasānam /

tatrārthadrṣṭir vijñānam tadviśeṣe tu caitasāḥ / (MAV Chap.1-v.8cd)

ity abhyupagamāt / ekasyām hi pradhānakriyāyām sādhyāyām yathāsvam guṇakriyānirvṛttidvāreṇ āṅgībhāvopagamāt karaṇādīnām karaṇādītvam / na ceha jñānavijñānāyor ekā pradhānakriyā / kiṃ tarhy arthamātraparicchittir vijñānasya pradhānakriyā, jñānasya tv arthaviśeṣapariccheda iti nāsti jñānasya karaṇatvam nāpi cittasya kartṛtvam, tataś ca sa eva doṣaḥ //

10) Ox. (12a2L~a4L.) は以下の通りである。() 内は写本の葉数、または場所 (L=left, C=center, R=right) を示している。また, [] 内は筆者による補い、下線部は LVP[1903-13] と異なる箇所を示している。

api ca yadi vijñānam karaṇam vi(C)śayasya paricchede kaḥ kartā na ca kartāram antareṇāsti karaṇādīnām sambhavas chidikriyāyām iva /

atha cittasya tatra kartṛtvam parika(R)lpyate tad api na yuktaṁ yasmād arthamātradarśana[m] cittasya vyāpāro 'rthaviśeṣe caitasānam /

tatrārthadrṣṭi[r] vi(12a3L)jñānan tadviśeṣe tu caitasāḥ / (MAV Chap.1-v.8cd)

ity abhyupagamāt / ekasyām hi pradhānakriyāyām / sādhyāyām yathāsvam guṇapradhā(C)nabhāv enāṅgībhāvopagamāt syāt karaṇādīnām karaṇādītvam na ceha jñānavijñānāyor ekā pradhānakriyā kin tarhy arthamātrapari(R)cchittir jñānasya pradhānakriyā vijñānasya tv arthaviśeṣapariccheda iti nāsti vijñānasya karaṇatvam nāpi (12a4L) cittasya kartṛtvam tataś ca sa eva doṣaḥ /

11) Tib. は以下の通りである。(Cf. 東方学院 [2001]p. 24 l.12~ p. 25 l.8) 下線部は LVP[1903-13] と異なる箇所を示している。

gzhan yang gal te she pa byed pa yin na/ yul yongs su gcod pa'i byed pa po gang zhig yin/ byed pa po med par byed pa la sogs pa rnams yod pa yang ma yin te/ gcod pa'i bye ba bzhin no// ci ste der sems la byed pa po nyid du rtog na/ de yang rigs pa ma yin te/'di ltar don tsam lta ba ni sems kyi bya ba yin la don gyi khyad par lta ba ni sems las byung ba rnams kyi bya ba yin te/ de la don mthong rnam par shes//de yi khyad par sems las byung / (MAV Chap.1-v.8cd)

zhes khas blangs pa'i phyir ro//byed pa la sogs pa rnams ni bdag nyid ji lta bu'i bya ba phal pa sgrub pa'i sgo nas/gtso bor gyur pa'i bya ba cig bsrgrub par bya ba la yan lag gi ngo bor gyur pa las byed pa la sogs pa nyid du 'gyur na/ 'diñi shes pa dang rnam par shes pa gnyis la gtso bor gyur pa'i bya ba gcig med do// 'on na ci zhe na/ rnam par shes pa'i gtso bor gyur pa'i bya ba ni don tsam yongs su gcod pa yin la/ don gyi khyad par yongs su gcod pa ni shes pa'i gtso bor gyur pa'i bya ba yin te/ des na shes pa byed pa nyid ma yin la/sems kyang byed pa po nyid ma yin no// de'i phyir nyes pa de nyid du 'gyur ro//

- 12) さとりを認識手段の認識対象とする PS[T] の解釈や註 7) で示した PVin においては、余計に認識に主体は認められないだろう。なぜなら、仏陀がさとりを認識する際に、アートマンを認めることになってしまうからである。
- 13) 自己認識については、次の PS[V] Chap.1-v.9 で説かれている。

「或いはこの場合、自己認識が認識結果である。(v.9a) 何故なら、知識は二つの顕現で生起するからである。＜(知識) 自身としての顕現した知識＞と＜対象としての顕現した知識＞と(の二つ)である。その両者の顕現をもつもの(知識)の自己認識が認識結果である。何故ならば一実(一)に、対象の決定がその本質だからである。(v.9b) 境を伴う知識が、(自己認識の) 対象である。その場合、自己認識に従って、対象の好ましいものや、好ましくないものを認める。

けれども、外界の対象こそが、認識対象である場合—(境を伴う知識の) 境顕現性こそが、その認識手段である。(v.9c) この場合、知識の自己認識されることが(知識) 自身の本質だけれども、それに基づかないで、(境を伴う知識の) 対象顕現性こそが、この認識手段である。何故ならば、この対象は—それ(境を伴う知識) によって、認識されるからである。(v.9d) 何故ならば、白や非白等と対象の形象が知識に顕現するように、そのようなかたちをもつこの境は認識される。」

(svasamvittiḥ phalam vātra(v.9a) dvyābhāsaḥ hi jñānam utpadyate svābhāsaḥ viṣayābhāsaḥ ca. tasyobhayābhāsasya yat svasamvedanam tat phalam.

kiṃ kāraṇam. tadrūpo hy arthaniścayaḥ / (v.9b) yadā hi saviṣayaḥ jñānam arthaḥ, tadā svasamvedanānurūpam arthaṃ pratipadyata iṣṭam aniṣṭam vā.

yadā tu bāhya evārthaḥ prameyaḥ, tadā viṣayābhāsataivāsya pramāṇam (v.9c)

tadā hi jñānasvasamvedyam api svarūpam anapekṣyārthābhāsataivāsya pramāṇam. yasmāt so 'rthaḥ tena mīyate (v.9d) yathā yathā hy arthākāro jñāne pratibhāti śubhāśubhādītvena, tattadrūpaḥ sa viṣayaḥ pramīyate. Cf. Steinkellner[2005-1] p.4 ll.3-14.)

Dignāga 以降、この自己認識は、唯識性と同義に扱われるようになるという。(桂 [1984] pp. 111-112 を参照。)

- 14) Dignāga にとって知識が道具、つまり認識手段となる理由は、前注 v.9c を参照。
- 15) 『刹那(滅)である時、あらゆる場合に非存在状態であるから、いったいどんな過去性がある

のか。さらに、刹那（滅）でないなら、永遠であるか、いったいどんな過去性があるのか。』(RA Chap.1-v.68)

『刹那（滅）に終わりがあるように、（その）始めも中間も考えられるだろう。

刹那（滅）は（これら）三つを本質としているから、世間の刹那（滅）の安立はない。』(RA Chap.1-v.69)

『さらに、始め、中間、終わりは刹那と同じである。始め、中間、終わりは、自からも、他からもあり得ない。』(RA Chap.1-v.70)

以上のように中<中の定説>の文章からして、刹那（滅）である事物は不成立であるから、（刹那滅は）不成立であると知られるべきである。」

(kṣaṇike sarvathā 'bhāvāt kutaḥ kā cit purāṇatā /
sthairyād akṣaṇike cāpi kutaḥ kā cit purāṇatā //(RA Chap.1-v.68)
yathānto 'sti kṣaṇasyaivam ādimadhyam ca kalpyatām /
trayātmakatvāt kṣaṇasyaivam na lokasya kṣaṇasthitiḥ //(RA Chap.1-v.69)
ādimadhyāvasānāni cintyāni kṣaṇavat punaḥ /
ādimadhyāvasānatvam na svataḥ parato 'pi vā //(RA Chap.1-v.70)
iti Madhyamakāsiddhāntapāthāt kṣaṇikapadārthāsiddher asiddhir avaseyā /
Cf. LVP[1903-13] p.546 l.3~p.547 l.1. イタリックは de Jong[1978] による。)

- 16) kaḥ paśyatīti cec cittam vyavahāreṇa kathayate /
na hi caittam vinā cittam vyarthatvān na saheṣayate //
/gang sems mthong 'gyur zhe na//tha snyad du ni sems brjod de/
/sams 'byung med par sems mi 'byung //don med lha cig mi 'dod do/
(Cf. Hahn[1982] pp.116~117)
- 17) katham tarhi sālambhanās cittacaittāḥ, sāmṃvṛtam etal lakṣaṇam na pāramārthikam ity adoṣaḥ // (Cf. LVP[1903-13] p.85 l.6.)
この場合の定義 (lakṣaṇa) とは次のようなものである。
「この場合、『所縁を伴う法とは何か。一切の心と心所である。』という āgama から、心と心所はある所縁によって生起する。順次色等によって（生起するの）である。それ（色等）は、それら（心と心所）にとって所縁縁である。」
(iḥa sālambanadharmāḥ katame, sarvacittacaittā ity āgamāt / cittacaittā yenālambanenotpadyante yathāyogaṃ rūpādīnā sa teṣām ālambanapratyayaḥ //
Cf. LVP[1903-13] p.84 ll.3-4.)
- 18) この箇所は Ox. の読みをほぼ採用し、従来と異なる解釈を試みた。従来の解釈については、丹治 [1993] pp. 174~175. や Ruegg[2002] p.114, Arnold[2005] p. 439 等を参照。
- 19) paryāyalakṣaṇam ca khyāpayati/
tatrārthadrṣṭir vijñānam tadviśeṣe tu caitasāḥ //(MAVChap.1-v.8cd)
tatrārthmātre drṣṭir vijñānam / arthaviśeṣe drṣṭiś caitasā vedanādyah /
(Cf. 長尾 [1964] p.20 ll.17~20)
- 20) これは以下の MAV[Bh] Chap.1-v.1 から理解できるだろう。

『虚妄分別は存在する。そこに二はない。けれども、空性はある。その(空性)の中にも、それ(虚妄分別)はある。』(MAV Chap.1-v.1)

その場合、『虚妄分別』とは、把握者と被把握者を分別することである。『二』とは、把握者と被把握者である。『空性』とは、その虚妄分別が把握者と被把握者という存在状態が離れたものである。『その中にも、それはある。』とは、虚妄分別があるということである。『このように、あるものが、ある所に存在しない。そこは、それを欠いている(虚妄分別は、把握者と被把握者として空である)と、あるがままに、観察する。さらに、そこには何かしら余るものがあり、それは現に存在しているものであると、あるがままに知る。』という誤りない空性の特徴が宣揚されている。」

(abhūtaparikalpo 'sti dvayan tatra na vidyate/

śūnyatā vidyate tv atra tasyām api sa vidyate // (MAV Chap.1-v.1)

tatrābhūtaparikalpo grāhyagrāhakavikalpaḥ / dvayaṃ grāhyaṃ grāhakaṃ ca / śūnyatā tasyābhūtaparikalpasya grāhyagrāhakabhāvena virahitatā / tasyām api sa vidyata ity abhūtaparikalpaḥ / evaṃ yad yatra nāsti tat tena śūnyam iti yathābhūtaṃ samanupaśyati yat punar atrāvaśiṣṭaṃ bhavati tat sad ihāstīti yathābhūtaṃ prajānātīti aviparītaṃ śūnyatālakṣaṇam udbhāvitam bhavati /

Cf. 長尾 [1964] p.17 l.16~p.18 l.7)

21) この MAV の心・心所説解釈は、Dignāga にとっては、心の自己認識と心所の自己認識である。

略号

PVin ; Pramāṇaviniścaya

PS ; Pramāṇasamuccaya

PS[T] ; Viśālāmalavatī Pramāṇasamuccayaṭīkā

PS[V] ; Pramāṇasamuccayavṛtti

PP ; Prasannapadā

MA ; Madhyamakāvatāra

MA[Bh] ; Madhyamakāvatārabhāṣya

MAV ; Madhyāntavibhāga

MAV[Bh] ; Madhyāntavibhāgabhāṣya

MMK ; Mūlamadhyamakakārikā

LT ; Lakṣaṇaṭīkā

RA ; Ratnāvalī

参考文献

片岡 啓

2007 ; Pramanasamuccayaṭīkā ad 1.1 和訳 ; 『南アジア古典学』 2, pp.1-79.

桂 紹隆

1984 ; ディグナーガの認識論と論理学 ; 講座大乘仏教 9 pp. 103~152 所収 .

斎藤 明

2006 ; Bhāvivēka's Theory of Perception ; 印度学仏教学研究 54-3, pp. 1212-1220 .

2008 ; ヴァーヴィヴェーカの識二分説批判 ; 印度学仏教学研 56-2, pp. 903~897.

東方学院

2001; チャンドラキールティのディグナーガ認識論批判—チベット訳『プラサンナパダー』和訳・索引— ; 法蔵館 .

丹治 昭義

1988 ; 中論釈 明らかなことばⅠ ; 関西大学出版部 .

1993 ; 実在と認識 中観思想研究Ⅱ ; 関西大学出版部 .

2006 ; 中論釈 明らかなことばⅡ ; 関西大学出版部 .

戸崎 宏正

1979 ; 仏教認識論の研究—法称著『プラマーナ・ヴァールティカ』の現量論— 上巻 ; 大東出版 .

1985 ; 仏教認識論の研究—法称著『プラマーナ・ヴァールティカ』の現量論— 下巻 ; 大東出版 .

長尾 雅人

1964 ; Madhyāntavibhagabhaṣya ; 鈴木学術財団 .

2005 ; 大乘仏典 15 世親論集 (中公文庫版) ; 中央公論社 .

服部 正明

1968 ; On Perception: Being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga's Pramānasamuccaya from the Sanskrit Fragments and the Tibetan Versions ; Harvard University press.

米澤 嘉康

1999 ; Lakṣaṇaṭīkā — A Sanskrit Manuscript of an Anonymous Commentary on the Prasannapadā — ; 印度学仏教学研究 47 — 2, pp. 1024~1022.

2004 ; Lakṣaṇaṭīkā — Sanskrit Notes on the Prasannapadā (1) — 成田山仏教研究所紀要 27, pp. 115~154.

Arnold, Dan

2003 ; Candrakīrti on Dignāga on Svalakṣaṇas ; YIABS 26-1, pp. 139~174.

2005 ; Materials for a Mādhyamika critique of foundationalism : An annotated translation of Prasannapadā 55. 11 to 73. 13 ; YIABS 28-2, pp. 411~467.

de Jong , J. W.

1978 ; Textcritical Notes on the Prasannapadā. ; IJ 20 pp. 15~59, pp. 217~252.

Michel Hahn

1982; NĀGĀRJUNA'S RATNĀVALĪ vol. 1, The Basic Texts (SANSKRIT, TIBETAN, CHINESE) ; Indica et Tibetica Bonn.

Louis de la Vallée Poussin (LVP)

1903-13 ; Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtras) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā
Commentaire de Candrakīrti Bibliotheca buddhica 4 ; St. Pétersbourg, 1903-1913 ; reprint Osnabrück
1970.

MacDonald , Anne

2000 ; The Prasannapadā More Manuscripts from Nepal ; Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens
44 , pp165~181.

2003 ; Interpreting Prasannapadā 19 . 3 - 7 in Context A Response to Claus Oetke ; Wiener Zeitschrift
für die Kunde Südasiens 47, pp143~195.

Ruegg, David Seyfort

2002 ; Tow Prolegomena to Madhyamaka Philosophy, Candrakīrti's Prasannapadā Madhyamakavṛtti on
Madhyamakakārika I.1 and Tsoṅ kha pa blo bzah grags pa / rgyal tshab dar ma rin chen's dka' gnad/
gnas brgyad kyi zin bris, Annotated Translations, Studis in Indian and Tibetan Madhyamaka Thought part
2 ; Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 54, Wien.

Steinkellner, Ernst

2005-1 ; Dignāga's Pramāṇasamuccaya, Chapter 1 ; A hypothetical reconstruction of Sanskrit text
with the help of two Tibetan translation on the basis of the hitherto known Sanskrit fragments and the
linguistic materials gained from Jinendrabuddhi's Ṭikā , Dedicated to Masaaki Hattori on the occasion of
his 80th birthday ; Access → http://ikga.oeaw.ac.at/Mat/dignaga_PS_1.pdf .

2005-2 ; Ernst Steinkellner, Helmut Krasser, Horst Lasic ; Jinendrabuddhi's Viśālāmalavatī
Pramāṇasamuccayatīkā Chapter 1 Prat 1 (critical edition) and Part2 (diplomatic edition) ; China
tibetology publishing house Austrian academy of sciences press ; Beijing-Vienna.

2007 ; Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya Chapters 1 and 2 ; Beijing-Vienna.